展示会「オランダ人・日本人・インドネシア人」の意義と評価

エリック・ソーメルズ

インドネシアの状態

まず簡単に自己紹介させていただきます。私はソーメルズと申します。オランダのアムステルダムにあります国立戦争資料館に所属する歴史家でありまして、かつ第二次大戦のヨーロッパの占領時代の研究もやっております。東南アジアのオランダ領の戦争体験をずっと研究しているものでもあります。

当時はオランダ領東インドという名前でインドネシアの人びとは支配されていました。350年間オランダはこの地域を植民地にしてきました。第二次世界大戦のはじまったパールハーバーの1941年の年末、オランダはアメリカなどの連合国の一員だったわけで、それで日本軍との戦争状態にはいりました。

第二次世界大戦が始まる直前のインドネシアの状態について簡単に紹介したいと思います。その当時30万人のオランダ人がインドネシアにいました。そのうちの約15万人がオランダ系の民間人でして、それ以外におよそ14万人のユーラシア人といわれる人がいました。彼らはオランダ人と現地の人たちの混血です。そういう多様なミックスした状態であったわけです。

この当時の30万人ものオランダ系の存在は、当時の東南アジア全体の中で最大のコロニーがこのインドネシアに存在したことを示しています。彼らの中で兵士たちはもちろん捕虜として、戦争捕虜（POW）の収容所に強制収容されました。オランダ系民間人は民間人抑留所に強制収容されました。ユーラシア人は基本的には収容はされませんでしたが、常時監視されまして、二級市民としての取り扱いをうけました。

この民間人の収容所は男もいましたが、多くは女・子供たちでした。男の子は13歳以上になりますと、男性だけの強制収容所に収容されるなど性別の分離が行われました。兵士たちはPOWの強制収容所に収容されました。彼らは泰緬鉄道など、インドネシア外のさまざまな場所での服役労働にかりたてられました。日本にやってきた人たちも多くいました。第二次大戦が終わった時に、このオランダ系の人たちはいったん解放されたかに見えましたが、彼らはその後も苦難に満ちた人生を送ります。というのは、オランダは再びインドネシアを自らの領土としようとして、インドネシアのいわゆる独立主義者、民族主義者との間で戦争を始めました。そして独立インドネシアの民族主義者との激しい戦いのなかで、1949年にオランダ政府が正式にインドネシア共和国の独立を認めます。その結果オランダ人たちはオランダに引き上げざるを得なくなります。この1945年から49年の間、オランダ系の人たちは非常に複雑な状況におかれたわけです。

第二次大戦中、日本人はこの地域におよそ30万人いました。いわゆるオランダ人とほぼ同数です。そのほとんどは軍人でしたが、かなりの数の民間人もこの中にいました。彼らはオランダ人とは異なる記憶と体験をしています。それ以外におよそ7千万人のいわゆるインドネシア系の人たちがこの地域には住んでいまして、彼らもオランダ人・及び日本人とは異なる体験・記憶を持っているのです。

展示会の特徴

今、国籍の違う三種類の人たちの話をしました。それぞれ違う体験をしたわけですが、それを一緒に展示することがこの展示の主なポイントです。そして特にこの展示では、普通の市民としてのそれぞれの個人体験に焦点を当てています。

もちろんこの展示のもう一つのポイントは、それぞれの観点の違いを意識してもらうことです。背景も違い、それぞれの経験も違うわけですが、その経験のもっと背後にある知識・情報の違いを指摘することも、この展示のポイントです。私の立場はオランダ側の、インドネシアに来たオランダ人の数を含めた知識・情報をお伝えすることにあります。

それから戦争直後、1945年から50年にかけて、インドネシアにいた30万人のオランダ人、およびユーラシア人がオランダに帰国しました。そして違ったそれぞれの背景を持ってオランダに移住することになったので、それぞれのナチスに対する感情の受け止め方

も、非常な違いを見せております。

展示への賛否

またこの展示の構成、考え方の背景として、この時期の経験の違い、受け止め方の違い、それによる考え方の違いが、非常に大きくて、このような展示をまとめるにあたっていろいろな非難や反対がありました。その背景としては、インドネシアにおけるスハルト体制だとか、その後全世界をおおった冷戦などの体制をどう評価するかという見解の違いがあります。こういったものを一つの展示あるいは考え方、コンセプトとしてまとめるにあたって、非常に多くの異論やいろいろな議論をのり越えていかなければなりませんでした。

さらに1971年に当時の天皇裕仁のオランダ訪問がありました。この時に第二次大戦中の戦争犠牲者が、(オランダ政府はもちろんですが) 日本はまだそれに対する責任を取っていないではないか、それなのに戦争を仕掛けた当時と同じ天皇が在位している、という抗議の運動が強くなりました。

さらに1960年代から70年代にかけて、公式なもの・非公式なもの、さまざまな記録が刊行されました。しかしこれらは被害者としての視点から書かれたものがほとんどでした。これまでは、オランダ人のインドネシアでの経験・歴史を捉える場合、犠牲者としての視点が圧倒的であったのです。これに対して、この展示は、オランダ人の体験の別の側面も同時に示そうとしたのです。

1999年の８月から３か月間、オランダのアムステルダムでこの展示をおこないましたところ、さまざまな反応がありました。幸いなことに大多数は肯定的なものでしたが、否定的なもの・批判的なものも数多くありました。

肯定的なコメントとしては戦後派の人たちから、非常に新しい知識を与えてくれるものだ、というものがありました。それはこの展示が、オランダ人の受難を示すだけでなく、一緒に苦労したインドネシア人たちの苦労をも見せるものでもあったからです。

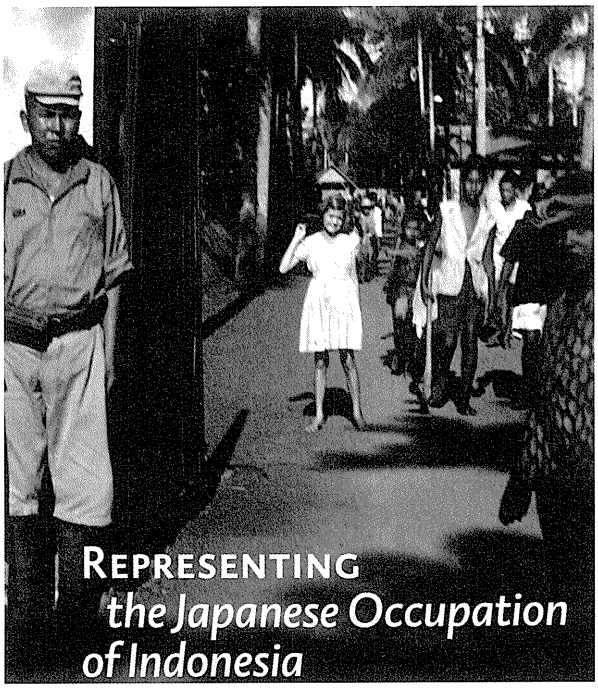
さらにオランダ人がほとんど知らなかったインドネシア人と日本人との関係、また彼らの独立運動を背景にした、三つの異なった国籍を持った人たちのことを示したことも、この展示のユニークな点でした。日本人の戦争犯罪人の裁判の不公正さに関する知識を与えるものでもありました。

批判的なコメントとしては、戦争体験者たち、特に捕虜収容所に収容された人たちからは、自分たちが経験した本当に辛かった大変な部分が展示されていない、日本側の視点に寄り過ぎているという批判を受けました。

あと一点だけ述べたいと思います。今あるこの写真ですが（写真参照)、解説書の表紙にも印刷されています。この写真はいわばこの展示のロゴマークにあたるものです。この写真は戦争中ではなくて戦争直後に撮られたものです。警備にあたっているのは日本人の兵士ですが、兵士の格好はしていますが戦後の写真ですので、元軍人です。奥はオランダ人の子供たちが収容されているところです。そこを警備しているのが日本人の元の軍人です。さらに右手のほうにはインドネシアの女性たちなどが写っています。

収容所から解放されたオランダ系の人たちは自宅に戻ったところ、独立派のインドネシア人たちの怒りを買い、襲われるようになったのです。そこで彼らは身の安全を求めて、元の収容所に舞い戻りました。日本の元軍人たちがインドネシア民衆の襲撃からオランダ人を守っているのが、この写真です。

日本人もオランダ人もともに敗者でした。まさにこの写真は私たちの展示を象徴する写真ですので、これを表紙に使いました。

［藤岡惇訳］

（講師　オランダ国立戦争資料館展示部長）
（訳者　立命館大学経済学部教授）